

発行：はつらつ編集局
発行日：平成 25 年 1 月 1 日
発行人：吉田 秀明
編集人：はつらつ編集委員
お問い合わせ：0135-23-3126



夢を正夢に

院長 吉田秀明

みなさま、新年明けましておめでとうございます。昨年の11月からきわめて天候不良で、身体が準備する間もなく急に気温が下がり、12月は、とても寒くて雪の多い真冬がいきなりやってきた感がありました。そんなことで、体調を崩される方が随分と多かったような印象がありましたが、みなさまは良い年を迎えられたでしょうか。

今年はまずお詫びを申し上げなくてはなりません。

昨年秋に開設を目指していた「回復期リハビリ病棟」の件ですが、リハビリおよび看護要員の不足のため、春頃までオープンがずれ込む見込みとなっています。この点につき、患者様をはじめ関係各位の皆様にご迷惑を申し上げます。ただ、病棟改修工事は10月に終わっていますので、スタッフが揃い次第、すみやかに稼働させることをご理解いただき、いまして御容赦いただきますよう、お願い申し上げます。

さて、今年、平成25年の余市病院のテーマについて述べさせていただきます。

1.救急に不可欠な医療機器の更新

これは高性能CT(64列以上)とMRI(1.5T以上)の2つを指します。まずCTですが、これはすでに診断と治療には必須の装置です。当院で現在稼働中のCT(4列)より検査時間が大幅に短縮され、さらに動く臓器の撮影も瞬時に行えるようになったため、心臓疾患や救急患者の診断に大きな威力を発揮します。一方のMRIは、脳神経や骨疾患の診断に強い装置です。最近増加傾向にある脳梗塞のきわめて初期の変化や、微量の脳出血などもとても鮮やかに描出されます。もちろん検査時間も短縮されますので、とくに救急の場面においては活躍が期待されます。

「いいものがあるから欲しい」のではなく、現在稼働中の当院のCTとMRIは、すでに耐用年数が過ぎており、メンテナンスが充分行いにくくなってきたことと、北後志の救急を担当する立場から、高度な診断能力を備えることが、地域医療に大きく貢献することになると考えたためです。

2.大規模停電時等における「病院機能維持」とくに独自電源の確保(複数年計画)

数年前の台風19号の際、余市も広範囲の停電状態に見舞われたことを記憶されている方もおられると思います。あのときは、余市病院も非常電源で最低限の活動はできていましたが、レントゲン撮影装置など、高圧の電気を必要とする検査機器等は使用できず、手術にも対応することができませんでした。小樽市に患者を搬送しようにも、風で倒れた樹木等により国道が遮られ、一時的とはいえ余市が「陸の孤島状態」になったことは大きな衝撃でした。昨年も室蘭地方で大規模な停電があり、大病院が休診を余儀なくされていました。このような事実から、地域で大きな役割を担っている病院には、独自の電源が必要であるとの認識を持つに至りました。当院の消費電力は最高で250Kw程度ですので、300Kw級の発電装置が備われば充分と考えます。また、平時は自己電源を活用することにより社会的な「節電」に寄与することができるという、副次効果も見込めます。

3.オーダーリングと電子カルテの導入準備

これは平たく言うと「紙を使わずパソコンで」ということです。従来、検査の指示箋やカルテは紙に書くという作業で作られますが、医療でも進められたIT化により、いまや紙を使わないのが主流になっています。当院はその点では世間一般から遅れをとっています。今後も病院として活動を持続するために必要不可欠な設備投資ですので、早急に導入したいと切望しております。

ところで問題は、費用がかかるということです。大雑把に言うと、1で3億円、2で1.2億円、3で1億円、計5億円以上になります。裏を返せば、私共はこの巨額の設備投資を抑えて我慢を重ね、やっと余市病院を運営してきたということです。しかし、上記1と3は病院機能には必要なものであり、とくに1のCTとMRIは救急診療を行うために絶対更新しなくてはなりません。

そこで地域の救急拠点の整備事業として、おおいに行政の力をお借りしたいと思っています。一案として「北後志公立急病センター(仮称)」を病院内に併設していただき、運営を医師会に委託する、などの方策があります。富良野市ではすでに実働していますので、実現不可能ではありません。

次に、予てより考える地域振興策について。

自民党に政権が渡り、地元からも国会議員が選出されました。10兆円の緊急景気対策も喧伝され、土木建築業界もかなりの期待を胸に元気づいているようです。

そこで提案ですが、道路や橋も重要ですが、いま一番この地域に必要なものは「自活困難者用マンション」と思います。独居高齢者、老夫婦二人暮らし、などの方が該当します。こういう状況の方が病気やケガで入院となった場合、身体が元の状態までは回復しません。せいぜい70%くらいまで戻れば良い方でしょう。それでも病院としては入院の必要はないと判断されますが、では「自宅に帰って大丈夫か?生活できるのか?」という難しい問題です。

地域の病院としては、そのような方を杓子定規に退院させる訳にはいかず(都会の急性期病院は入院前から退院日が決められているのが普通です)、介護・支援体制、自宅の改修、あるいは施設入所など、総合的な介入をしてやっと退院に漕ぎ着けるのが現状です。その中で、家族や親戚の居る他の町に引き取られて行く方も増えつつあります。つまり住民がじりじりと減少して行く大きな一因と感じております。

それを食い止めるには、身体能力が低下した方でも安心して自活できる住環境の整備が必要です。地域における病院機能や介護サービス等には人的限界がありますので、ある程度まとまっていた方がより手厚くお世話できるようになります。具体的には、病院の近くにコンビニを備えた公営マンションのようなものが良いのではと考えています。

以上は高齢者対策です。さらにもう一つ。若年者対策というか、根本的な地域振興策として「人を育てる」ことを提案します。

4年前の新春の挨拶でも触れていますが「人をまもり、人を育てる」町にすることが地域を発展させる鍵と考えています。病院はこのうちの「まもり」という役割の重要な部分を担っています。「育てる」とは即ち教育です。とくにまず初等、中等の教育に力を注ぎ、希望する高校や大学等に自在に進むことができる学力が身に付く町として、実績を築くことが肝要です。3年前の医学生に対するアンケートで「赴任先の町を選ぶ時の条件」として、約半数が将来家庭を持った場合の「子弟の教育環境の充実」を挙げています。つまり選ばれる町の条件として「教育レベルが高い」ことは必須と解釈されます。風土がよく、実り豊かで食べ物もおいしいことではすでに定評のある余市に、もうひとつ「まもられる、育つ町」という評価が加われば大きな発展が期待されると信じております。そしてその結果、地域ではいつも不足している医療人の安定的な確保が見込めるものと期待しています。

最後に、余市病院では、小中学生対象に「体験セミナー」を開催しています。医療の現場を体験してもらい、将来の進む道として選んでもらうことを目的にしています。今後も年数回企画する予定ですので、できれば周りの方々に宣伝してください。地元の子でなくても参加できます。また将来、我々に余力ができれば、医療系進学希望者対象の無料学習塾を設けたいとも考えております。「人をまもり」病院で「人を育て」まもる仲間に加わってもらおうのが、地域医療を担う私達のささやかな夢だからです。平成25年 元旦

余市病院の求めるもの 患者様の笑顔 地域への貢献 自らの幸せ



救急件数(12月)

外来受診257件 うち入院45件
救急車来院69件 うち入院26件



クリスマス会